まつりが育む地域の力

“まつり”と性

佐伯 順子 ● *Written by Junko Saeki* 同志社大学教授

大学時代、民俗学のサークルで千葉県のある小さな農村にフィールド・ワークに出かけた際、正月行事の聞き書きで、「かつては、正月飾りとして女性と男性の生殖器を野菜で作っていたが、教育上問題があるとの話になり、松や蓬莱の飾りものに変わった」と聞いた。若き日の私にとって、性器が正月飾りという話は驚きであったが、それが時代によって消滅したことにも興味を覚えた。性の習俗は恥じらいとは異なる次元にあったようだ。だが、なぜすたれたのか。

私が経験した村では衰退していたが、性にまつわる信仰や祭りは、実は日本各地に存在し、今日でも残されている。愛知県・田県（たがた）神社の豊年祭（三月十五日）では、大男茎形（おおおわせがた）と呼ばれる男根形の巨大な御輿を担いで、男たちが練り歩く。巫女たちも男根の形のものを持って歩き、これに触れると子どもを授かるという。文化人類学の研究者らとともにこの祭りを見学した際、沿道は見学者や、巫女たちの持つ男根に触れようとする人々で埋め尽くされ、活気に満ちていた。

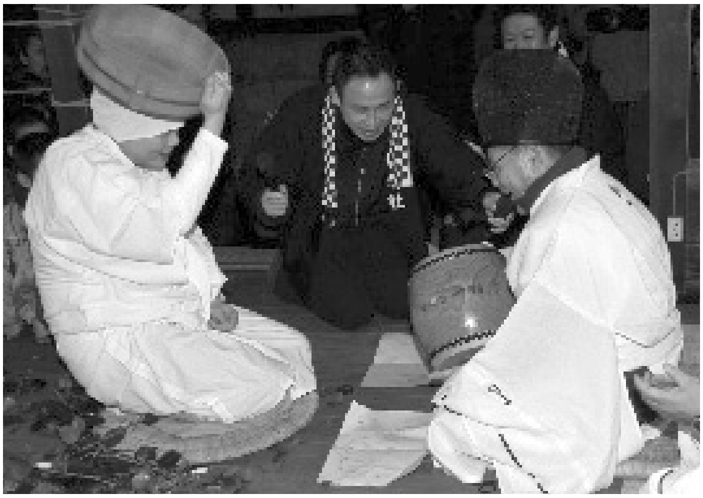
田県神社の祭神は五穀豊穣と子宝の神である御歳神と玉姫神であり、境内には男根型の石も随所に設置されている。近隣の愛知県犬山市大懸神社の豊年祭では、女陰をかたどった山車が練り歩く。女性と男性の性の営みは、豊穣と出産を招来する行為として神聖視され、性をテーマにした祭りに結びついている。

飛鳥坐（あすかにいます）神社（奈良県明日香村）のおんだ祭（二月の第一日曜日）では、神楽殿を舞台として、夫婦の営みが上演される（写真1）。祭りの第一部は五穀豊穣を願う御田植神事で、牛を使った田植えの様子が演じられ、第二部では、天狗とお多福による夫婦和合のパフォーマンス。夫が妻の上をまたいだり、紙で下半身をふく仕種があったりと、かなり直接的な描写だが、決して淫靡（いんび）な雰囲気はなく、明るくユーモアに満ちている。やはり、文化人類学者や宗教学者のグループで見学した際には、見物席を確保するのも大変なほどの熱気に満ちていた。この神社は、普段は明日香村の一角にあるひ

【写真1】飛鳥坐神社のおんだ祭における夫婦和合のパフォーマンス。使用した紙が見物人にまかれ、持ち帰ると福が来るという

っそりとした空間だが、祭りの際には参道に露店が並ぶ賑わいぶり。高校時代、修学旅行でここに参拝したとき、ほの暗い参道に男根が並んでいた風景も、神秘的に思い起こされる。

これらほど著名な祭りではないが、奈良県川西町六縣（むつがた）神社の御田植祭（現二月十一日、かつては二月十四日）も、小規模ながら古風な味わいある祭りだ。「子出来おんだ祭り」とも呼ばれるこの祭りの起源は、平安時代に遡るともいわれ、拝殿にて、地域の厄年の男性が妊婦の役を演じるパフォーマンスがある。厳冬の二月の夜、自分の誕生日（当時）に一人で見学に出かけたこの祭りは、ほかに外部の見学者、観光客らしき姿もなく、それだけに、地域の生活、文化に根差した力強さに満ちていた。舞台装置も何もない薄暗い神社の拝殿が、迫真の演技によって見事に田んぼに見えてくる。田植えや螺拾いの所作では、まわりで囃す子どもたちが、「そのへんまだやで」などと絶妙な合いの手を入れる。まこと、子どもたちにまさる演者はいない。



【写真2】奈良県川西町六縣神社の御田植祭。妊婦を演じる男性と神主のほほえましいやりとり

男性がお腹に太鼓を抱え、女装して妊婦を演じる姿は（写真2）実にユーモラス。「大きなお腹やな、何食べたんや」と問われ、「マツタケ二本」などと恥ずかしそうに答えるやりとりも笑いを誘う。弁当を夫のもとに運んだ妊婦が、陣痛に見舞われて出産（お腹から太鼓を放り出す）する展開は、ほほえましいハッピーエンド。

生殖器が主役となったり、性の営みや出産が舞台化されたりと、形式は様々であるが、いずれも、命の源である性を崇める心と豊穣を祈る心が一体化している。これらの祭りが二月から三月という、冬から春への季節の移行とともに演じられることも、春の到来という、自然の移ろいと人の命の再生との融合をみせている。

出産やその源としての女性と男性の営みが、狩猟、農耕などの生産活動の豊かさをもたらすという信仰は、日本のみならず通文化的にみられ、こうした信仰をフレイザーは「類感呪術」と呼んだ（『金枝篇』）。性は一見、極めて個人的なプライバシーに関わる出来事であるようだが、実は人間の生産活動を通じて、集団としての社会の命運をも握る重要な役割を担っている。「性は豊穣祈願の儀礼の主要なテーマ」（波平恵美子「民俗としての性」『日本民俗文化大系10 家と女性』１９８５年）であり、近代以前の日本社会では、そうした性の社会的機能が祭りや年中行事のなかで体現され、多数の事例が存在する（波平前掲論文、藤林貞雄『民俗民芸叢書14 性風土記』１９６７年）。

江戸時代の春画が、防火の守りや夫婦和合を祈る嫁入り道具となっていたことも、性崇拝の都市化された形態といえる。だが、性をタブー視する近代の価値観は、性信仰を徐々に社会の背後に追いやっていった（拙著『「愛」と「性」の文化史』）。神聖視からタブー視へ―性への観念の劇的な転換が、冒頭のような年中行事の変化を生み出したのである。

「旧暦小正月の塞ノ神祭（さいのかみまつり）に男根を祭る地方も少なくありませんが、これを青年たちばかりでなく、男の子が司祭するという習俗は、性教育流行の昨今ながら、おとなたちは逆に困った顔をしていることでしょう」（藤林前掲書）と、藤林氏も、近代的な性の概念と土着的な性信仰とのはざまでゆれる地域の人々の思いを伝えている。山形県東田川郡のある村では、一月十四日の夜に男の子が集まって木の男根を削って顔を書き、セドと称して雪室に安置するという（同前）。長さ二、三尺（約60~90センチ）、直径五、六寸（約15~20センチ弱）という

から、やはり写実的な大きさではない。これを安置してから〝塞の神の勧進〟と称して、米や餅をもらいに家々を歩くという。

平成の現在ではすでに消滅しているかもしれないが、ことさらに性教育などと説かずとも、地域の行事を通じて、子どもたちが自身の性にむきあい、性を尊重する念を養う経験を、おのずと積んでいたことがわかる。性の祭りは地域の手による情操教育という面もあるのだ。共同作業で〝大切なもの〟を造ることによって、幼い頃から地域住民で助け合う連帯意識を養うことにもなろう。性は地域住民の絆の原動力とさえいえるのである。

だが、明治以降の近代化の波のなかでの西洋的な性道徳、特に精神性を重んじるプロテスタンティズムの禁欲的な道徳観が日本社会に普及していった結果、性の祭りは抑圧されてゆき、一方で性についての無知も解決すべきという、転倒した意識が生じる。性の概念の変容は、都市化や過疎化によって祭りが衰退し、地域住民の絆が失われることと表裏一体だったのである。

日本の年中行事は、田植えと結びついて自然の変化と一体化しているが、正月や祭りという非日常的な時間に、普段は隠している身体の部分を露わにすることは、聖なる性の非日常的な力を物語るものである。男女の盆踊りや、女綱・男綱を交わった形に結び合わせて引き合う大綱引きも、性や出産と結びついた豊穣儀礼の一種とされる（写真３）。森鴎外が『キタ・セクスアリス』（１９０９年）で、盆踊りの後の男女の交わりを、野蛮で穢れたものと批判的に描いているのは、近代化以降のインテリ的性道徳を象徴している。

明治以降の日本人、特に知識人といわれる人々は、西洋の価値観に影響されて性をタブー視するようになったが、『聖書』で蛇に象徴される肉欲を罪悪視するキリスト教文化圏よりも、イザナミ・イザナギの国生み神話を持つ日本文化においては、性崇拝が抑圧されずに祭りのなかに表出している。田県神社の豊作祭は海外の人々にも人気を集めているが、魂の永遠と肉体の有限を説く思想から、性を抑圧する傾向のあるキリスト教文化圏の人々の目に、おおっぴらに性を賛美する民俗がエキゾチックに見えるのも無理からぬことである。

性的な祭りは、現代ではしばしば「奇祭」と称され、ネット上でも話題を集めている。神社自身が、ホームページで「天下の奇祭〝おんだまつり〟」（飛鳥坐神社ＨＰ）と自己ＰＲしているほどだ。だが、〝奇妙で珍しい祭り〟という概念は、性をタブー視する近現代の視点による。逆に、命を生み出す性への厳粛な畏怖の念こそが、性の祭りの源であることも、心にとめておくべきであろう。

【写真３】地元の住民が一丸となって行う大綱引きの様子

近代化以前の性崇拝の世界においては、女性の力が男性と同等に認められていたことも重要である。「夫婦ともかせぎ以外の生活など想像もできない農村や山村や漁村」の「たくましく働く日本女性たち」が、女性のみに純潔性や貞操を求める「不平等」に「納得しておとなしくしていた気づかいもありません」という指摘（藤林前掲書）は鋭い。藤林氏の議論は、今日のジェンダー論でいえば、〝夫＝生計の担い手、妻＝家庭〟という近代型の性別役割分業が、女性のセクシュアリティと性文化の抑圧を同時にもたらしたことを示唆して

いる。人間は単性生殖ではないのだから、新しい命の源となる性の営みは、女性と男性が協力しなければ成り立たない。性信仰の世界において、女性にもまた、性の”自由“（近代的用語）が認められていたことは当然である。祭りという非日常的な時空において、女性も男性もともに性的な”解放“（これも近代的概念だが）が認められていたことは、男性中心の近代的性モラルとは異質な、祝祭的な性のあり方を物語る。

さきに紹介した奈良県川西町の例のみならず、豊作、豊漁祈願や予祝行事で男性が女装する例も少なからず存在する（福島県大沼郡会津美里町（旧 高田町）の女装男性による早乙女踊りなど）（写真４）。これは、女性を穢れたものとして遠ざけるためではなく、逆に、男女両性の「完全なる結合」が「豊かな実りをもたらすという信仰」（波平前掲論文）の表現であると解釈される。祭りにおける性は、女性と男性の融合を通じて、人間の命の原点を思い起こさせるのだ。

自然のサイクルと結びつき、人間の肉体＝命の力を尊重する性の祭りは、今日風にいえば、極めてエコロジカルな祭りともいえる。都市化、近代化された生活のなかで、忘れがちな自然との共生、自然とともに生きる人としての身体と心のあり方を、性の祭りは思いださせてくれる。原発事故に苛まれる今日の日本で、性の祭りが伝えるメッセージは切実に尊い。

【写真４】福島県大沼郡会津美里町（旧高田町）の御田植祭における早乙女踊り。男女の融合による聖性の表現とみなすことができる

祭りはまた、さきにも述べたように、地域の絆を高め、地域文化を活性化する役割も果たす。「奇祭」というPRは一見あざといようだが、日本国内のみならず、海外からも集客効果がある祭りは、地域経済の活性化にも欠かせない存在であり、認知度を高めることは決して悪いことではない。田県神社の祭りでは、生殖器型の飴やチョコレートもお土産に売られており、商業効果も大きい。

一方で、過度な商業化が、祭り本来のあり方を見失わせることにも注意を払わねばならない。交通も至便とはいえない地域の小さな神社で、地域住民による地域住民のための祭りとして行われていた川西町の祭りは、多数の観光客に囲まれた著名な祭りにもまさる、濃密な空間であった。日常生活では隠しがちな性の営みを演じ、共有することは、人々に強い連帯意識を生む。地域住民の絆としての祭りは、自己完結的な”知る人ぞ知る“でよいのであり、それこそが、地域文化継承の本来の姿ともいえよう。

茨城県牛久市の鷲宮神社の秋祭りでは、アニメのキャラクターを描いた御輿に「萌ーえっ！萌ーえっ！」という掛け声がかかるという（岡本健「とある地域の超萌観光（ツーリズム）」『まほら』第70号 ２０１２年）。同地域がアニメの舞台になったためというが、「萌え」もまた、形を変えた性の祭りといえるかもしれない。命の再生を祈る性の祭りが、地域の絆と再生を約束する祭りであり続け、将来にわたって生命と自然の大切さを発信し続けるように…。

佐伯 順子（さえき・じゅんこ）

同志社大学教授、比較文化学者。1961年東京都生まれの関西育ち。84年学習院大学文学部史学科西洋史専攻卒業、89年東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専攻博士課程単位取得満期退学（92年修了＝学術博士）。祖母は能楽師、母はオブジェ作家の佐伯統子（もとこ）。能、歌舞伎のような芸能を中心として日本文学全般に詳しい。98年サントリー学芸賞、山崎賞を受賞。主な著書は、『遊女の文化史』（中公新書）、『「色」と「愛」の比較文化史』（岩波書店）、『「女装と男装」の文化史』（講談社選書メチエ）など。